

九州大学附属図書館音無文庫蔵三冊本『とりかへはや』 解題と翻刻（二）

千葉, 直人
九州大学 : 専門研究員

<https://hdl.handle.net/2324/7395355>

出版情報 : 文献探究. 63, pp.1-22, 2025-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



九州大学附属図書館音無文庫蔵三冊本『とりかへはや』解題と翻刻(二)

千葉 直人

凡例

- 一、本稿は、九州大学附属図書館音無文庫蔵三冊本『とりかへはや』
- 二一丁の表からの六〇丁裏までを翻刻対象とした。翻刻に際して、底本の配字配行や空白、誤謬などを含めてなるべく忠実に再現するよう努めた。ただし、一行に書ききれなかった字を行末の横に追い込んでいる場合は、一行書きとした。明らかな誤謬と考えられる箇所には、ルビに「(ママ)」と記した。また、何丁目にあたるかを「二一才」のように示し、表裏は「オ・ウ」で示した。なお、本文における濁点は本来的なものではないと考えられるため、省略した。
- 一、見せ消ちがある箇所は二重取り消し線を付し、傍書がある場合はその右にルビで記した。
- 一、補入記号は「。」で示し、傍記をその右にルビで記した。
- 一、漢字は概ね通行の字体で統一したが、「声・聲」など、字形の相違が大きい字体は区別して表記した。
- 一、変体仮名は通行の仮名に直したが、「見る」「すく世」など、仮名字母と漢字の意味が一致する場合は、漢字で表記した。
- 一、頭注・傍注などは基本的に省略したが、異文注記の類、「かゝつ

らふ敷」のように他の本文の可能性を提示するもの、漢字の読みなど、本文に関わるものについてはそのまま残した。

- 一、そのほか、組版の都合上再現できない箇所、摺消などの補足する点がある箇所には傍線を付し、行頭に番号を掲げて補注で詳細を説明した。

①なくすみのほりたる宰相の中将もこよひの御あそひにさふらひていまはたゝひとかたに大とのひめ君の御ことをおもひこかれてれいのかひなくともこの中納言に恨みめまたよになきかたちけはひもみまほしきさになくさめんと思ひてまかて給はずなりぬるをいつくのくまにはひかくれてみえぬなるらんとくかゝひありきけるにこのころをきゝまとひたつねきてみればおりものゝなをしさしぬきにくれなるのつやこほるはかりなるをぬきかけていとさゝやかにみゆれとわかくおかしけにてほかけにひかるはかりめてたくみえて

つねよりもうちしめりたるもてなしけしき袖ぬ
れわたるにれいしめたるにもすよになきかをり
なるををのこの身にめてたくみゆるをまして
この人のひとこともかけよらんをきゝしのふ人はあら
しかしとらやましくわか身はつかしけれ
とひきとゝめてわりなき事をうらみいふもいと
えんにおかしうなまめきたるはいとにくからず
人はいかにもすへて身にならほしそめかたらひ
などせすいとあまり物とをくのみもてすくる心にも
この人はかりにはさしはなちかたうあはれなれ
はかうのみの給ふをなへてことよき御つきくさの

「二二ウ

うつりやすきはうしろめたけれと心くるしう
おもひきこゑさするをり／＼侍れとみつからの
心にまかすへきかたなき事にてたゝかくのみう
け給けるこそかひなくいとほしけれとうちなけ
きて身をおもひしりつるなこりいたくなかめつ
るけしきなりおもふ事なける身になにの
あかぬことゝよとゝもになけかしきならんあまり
ことさらひまめやかなるもいみしうおもふこと
の有なめりみる人とてもあかぬ事ありとはき
かぬを常の事にそれをはめならしていかはか
かりのここのかくはおほゆるならんこのころの東宮
などの御ことかそれもこの人の御身にはいといみし

「二二オ

うありかたかるへきならすいたくつゝむ事ある人の
ことのほかにあはれなるかなとおしはかり氣しきと
りてよるつにとりなしつゝおほさん事は身に
かへてもたはかりけしきとりてかなへ奉りてんふ
かくへたて給へるこそとうらむるにこたへんかたも
なければわかみにさりてきこえあはせたらんにし
かやすかりぬへき御こゝろなめりとうちわらひて
そのことゝ思ふならねと月みれはいつまでとの
み物そかなしきこたへたる聲もいみしうにほひあり
なつかしうおほゆるにいまめかしきくせはほろ

「二二ウ

／＼となかれて

そよやその常なるましき世中にかくのみ物
を思ひわふらんとつみふかくのみおもひしら
れ侍れはこの御けしきをみすてゝふかき山に
あとを絶なむと思ふとかたらへはそはしもさお
ほしたつ時はおくらかし給ふなよいかてかくて
世にはあらしとそゝろにおほゆる心のとし月
にそへてもまさり侍れとさすかにえこそおもひ
たち侍らねとあはれにうちかたらひあかして
おの／＼まかてゝもこの中納言よろつめてたくすく
れたる中にもけちえむにこまやかなるをけはひ
などの女にていみしうみまほしうおかし
うもあるかなとこひしきにせいとゝいもう

「二二オ

との姫宮はおもひやられけるかく心をつくしおもひまとへとかけてなすらひにきゝ
いるへきけしきならぬをいかにせんとおもひわふるに院のうへ東宮をいまはたちはなれてちかくもえみたてまつらせ給はぬを御めのとなどいひてもはか／＼敷心はせ有人もさふらはす我御みつからはいと物はかなくいはけなくのみおはしますをうしろめたくおほつがなくおほしなけきこえさせ給ひてこの大殿の

ひめ君むことりうちまいりのかたはおもひたへてきこしめすをこの御うしろみにせはやとおほしなりてまいり給へるに御ものかたりなとこまやかに聞え給ついでに中納言のいもうとはいかにしかさんとおもひおきてられたるそとはせ給ふれいの猶御けしきあるかとむねつふれいかにも／＼思ひ給へすおやと申せとあさましうとくはつかしきものに思ひてみえ侍ればあせになりて心ちさへたかへたる人なればあまなとになしてその方におもむけてやみなましとのみなむおもふ給つなりにたるとて打

なき給ひぬるをけに世をのかれんとにはあらざりけりとあはれに御らんしてそれいとあるましき事なり東宮はか／＼しき人なくおの

「二三ウ

れをたちはなれていと心くるしきをその君御あそひかたきにまいらせ給へ世の中にともかくもあらは后にはる給なんとおほせらるゝに中納言のことおほし出られてこれもさるへきやうこそはあらめとうれしくもめつらかにもさま／＼御心みたれてけにさほとましらいはつかまつりもやせんとてはゝなる人への給ひあはせんとてまかて給ひぬうへにかくなときこへ給へはいさやいかなるへき

「二四ウ

事にかとえ思ひさためられてなんとの給へは中納言の有さまをみればこれもかうさまにてよかるへきにもやあらんおほせ事たかへすけに後のくらゐにさたまり給ふやうもありなんおもひのほかにてたき事にてこそはあらめとおほすあらまじしことにもむねそさはき給ふや御いのりさま／＼にせらるおなしくはとくとおふせらるれば十一月十日ころにまいらせ奉り給ふなに事かはあかぬことあらん女房四十人わらはしもつかへ八人めてたくかしつきたてゝまいらせ②給によのつねなるへき御ましらひにもあらぬに

「二五ウ

その事となくてさふらひ給はんもそゝるなれは尚侍の督になりてそまいり給ひける東宮はなしつほにおはしませは御つほねはせようてにせられたるしは／＼よる／＼のほりて

「二四オ

③ひとつ御帳に御とのこもるにみやの御けはし
ますをさこそいみしうものはちしつゝまし
き御心なれとなに心なくうちとけたる御らうた
けさにはいとしのひかたくてよる／＼御とのゐのほ
といかゝさしすぎ給ひけん宮はいとあさまし
うおもひのほかにおほさるれとみるめけはひは
いさゝかうとましけもなく世になくおか

「二五ウ

しけにたを／＼とある人さまなれはさるやうこ
そはとひとへによき御あそひかたきとおほしましはり
よになくあはれにおほえ給ひけりひるなども
やかてうへの御つほねにさふらひ給ててならいゑ
かきことひきなとおきふしもろともにみたて
まつるによるつゝましくはつかしきものと
うつもれしほとのとつれ／＼よりは何事も
まきるゝ心ちし給ふいまとてわつらはしき思ひ
あるましきならねは宮の宰相もはなれす中々
さひしき窓のうちにこもり給へりしほとこ
④そおもひまうくかたなかりしか中／＼かゝる

「二六オ

かたにたち給へるはいとうれしくてよるひるせん
よう殿のわたりをはなれすおほかたのけしき
をもみるにけたかうもてなしたるさま
おほかたのおほえよにもいみしきをいかなら
ん世に我おもひかなへんとのみそおもひ給ひける

そのとしの五節に中院の行幸ありければ
みな人／＼をみにてまいる中にも宰相中将權
中納言のあをすりいとゝいみしうみゆき
い相はいとゝそゝろかにをゝしくあさやかなる
さましてなまめかしうよし有いろめきたるけし
きいとおかしうみゆ中納言ははな／＼とみれとも

「二六ウ

／＼あくましうにほはしうこほるはかりの
あいきやうにるものなきにもてなしありさ
まもさはいへとなこやかにたを／＼といとなつか
しきほどの人にこよなくすくれてめもあ
やなるを御かたの人／＼おかしとみるに
宮のさい相はいさゝかも人のけわひするところは
たゝにもすすかならずたちとまり物なとい
⑤うを中納言はみるめにたかひて宰相のゆき
もやらすとゝこほりかちなるをしりめにみお
こせつゝすきぬるをひのくま川ならはしはし
みつかへともうちいつへくみなみおくらるゝ

「二七オ

なかにもしみていみしとおもふ人有けりみすい
しんのたちおくれてまいれる申へき事あり
かほにけしきはみてさふらへはなに事そとと
はせ給へはれいけい殿のほそとのゝ一のくちにな
ちまねきとゝめてまいらせよと侍りつると
ていみしうえんなるふみとりいてたりあな

おほえなとてみ給へは

⑥ あふ事はなへてかたきのすり衣（きぬ）かりめにみるそしつ心なき
といとおかしけなるをあやしたれならんとう
ちほゝゑまれてさわかしければ返事もせずな
さげなくいとほしさに事はてゝみな人もしつまり

「二七ウ

ぬるに夜ふかき月のいとあかくすめるにれけい
てんのほそとのをとかくたゝすみて

あふ事はまた遠山のすりめにもしつ心なくみける（しほ）
たれなる とうそふくに人こゑもせず人のなきに
やと思ふふみいたしつる一のくちに

めつらしとみ（つら）ゝる心はまかはねとなにならぬ身のなのり
をはせし とこたへたるけしきもなへてならす
おかしかなりたちよりて

なのらずは誰としりてかあさくらやこの世のまゝも
契（いしな）かはさん これやかたきのすり衣なりけるな
とそこはかとなくいひすさむけはいのちかま

「二八オ

さりはたなつかしういみしくあいきやうつき
たるをいとゝ心にしみておかしと思ふにのとやかに
たち給へるいかゝあらんといとつゝましようや（ま）まし
けれとよのつねのさまにみたれいりなとす
へうもあらず女も女御の御をとうとやうの

⑦ 人なるへしなへてのけしきならずとみしらる

れはなさけなからぬほとにかたらひて人ゝくるお
とすれはうちしのひて立あかれぬるやうにひとめ
もみる人の心をつけてまちおほさんとこころも人の
きゝつたへん事もしらすきこえこちかゝるあま
たあれと人のほとかろらかならすいとおかし

「二八ウ

⑧ かりぬへ（われは）きはなさけなからぬほとにをりゝいひ

⑨ かはしさらぬかきませのほとはしらすかほにて
きゝすこしいとこよなくものとほくもてをさ
め給へるをたまのきすとあかぬことに思ふ人ゝあり
この宰相のあまりすくさすたつねよりいひ

かゝりうかゝひありくをおかしとおもふ人はおほ
かりけりそのとしたちかはりついたちころかすめ
る空ははるのけしきとのみみえなからまた
ふるとしにかよふ雪うちちりおかしきほと

にせんよう殿にまいり給へれば中納言もさふら
ひ給ひけりさとの御すまひにてはいにしへは

「二九オ

⑩ うへたちの御いとなみこゝろのなこりことのほか

にうとゝしかりしかとこの二所のほかには
又たくひもなし我世もしらぬをよつかぬあり
さまをもことひとにいひあはせ給はんより

⑪ いかたみにうちかたらひつゝこそすくし給はめ
ことのほかの御ものはちにもやのうちのみすのへた

てはなをあへかりしをうちに参り給ひてはおりの
ほりの御かしつきのほとにけちかくならひかん
の君もよをおほししりやう／＼おもなれゆく
心にやいまはたゝ几帳はかりのへたてにてものなど

「二一九ウ

いとなつかしうきこえ給ふによにゝすおかしき
御けはひなど我身はさるものいひおきて此あり
さまをたにれいの人にみたてまつらはやとあかず
かなしうおほすかんの君もこの御ありさまをみる
たひことにむねうちつふれつゝかたみにおほし
みたるゝ心のうちにもおのつからさるへきほとゝいひな
からうとからすあはれもふかりけり御しつらひに
はかうはいおり物の御そ御几帳は三重なるに女房
などとはうめのいつへをひとへうちかさねつゝかうは
いのおりと（まご）ゝからきぬもへきのみえの色あひ
もよになくつくしてかすもなくなみゐさふら

「三〇オ

ふに中納言むらさきのおりものゝさしぬきく
れなゐのいろふかくつやこほるはかりなるをいたし
てあさやかについゐ給へるかたちのつねよりもは
な／＼とあたりニコほるゝあいきやうみまほしくな
つかしけなることいとたくひなきをれいのもとゝも
にむねあくよなきとのゝ御心のうちなれとみる
にはうちゑまれてものおもひのわするゝ心地
して御帳のうちをさしのしき給へればかう

はいのうへうすく匂ひたる御そともにこきかい
ねりさくらのおり物の御こうちきかうはい重
の御あふきをもてまきはし給へる御かたちは

「三〇ウ

中納言のかほの匂ひをうつしとりたらんほ
とにみわきかたきまでかよひ給へれとこれは今す
こしあてにかほりなまめきたる所やこよなく
おかしからん御くしはつや／＼とまよふすち
なくゆるゝかにかゝりてたけに二さくはかりあま
り給へるすゑつきのしろき御そにけさやかにも
てはやされたるなといつともなくゑにかきた
るほとなるを見ることにあないみしとむねう
ちふたかりてこの御有さまのよろしやかにあ
かぬ所あらましかはさはれやあまほうし
になしてふかき山にあとをたえ給はん事も

「三一オ

あたらしきおもひはうすくやあらましかく
すくれ給へる御さまともにつけてはうれはしう
もかなしくもかた／＼もろき涙そこほるゝ
くれて月いとあかきに御ことのねもいかゝなり
たる中納言の笛のねにあはせてうけ給はら
んとてさうのことそゝのかし聞え給ひて中
納言によこふえ奉り給ふれいのすみのほり
おかしけなるねのはるかに雲井をわけてひゝ
きのほるやうにおもしろういみしきをな

みたとゝめかたきにかきあはせ給へる御ことの音お
とらすかきりなきをあたりもさらぬ宮の宰相立

「三二ウ

きゝけるにふえのねもことの音もいみしのことや
この世の物ならぬいもせの御さえともかなかたち
ありさまもかくこそはあらめと聞くにそゝる
に泪こほされてしのふへくもあらねとまやのあ
まりをうちうそふきてそりはしの方にたち
いてたれは中納言ひはをふととりかへておしひら
きてきませとかきならしたるそとはり帳な
らぬこそわひしけれとて心ときめきせらるれ
とおとゝのこと／＼しきまましていてる給ひ
ぬれはかひなくくちおしうていとすくよか
になりぬこと殿上人かんたちめなとまいり

て御たいめんあるにもさい相は有つる御ことの音のみ
みゝにつきてさはかりな事に世のひとつ
ものなる中納言のめうつしにもいかはかりな
らんことの御みゝにもとゝまりなむと思ふ
にいとねたく口をしようてひは奉り給ふを
わりなくすまひ給ふ女房など中納言殿に
こそひじからねなへての人にはこよなくすくれた
るをいとなつかしうおかしとみけりおなしみ
かきのうちになりては時／＼かやうのことのねを聞に
もいはうつなみのとのみおもふ事のかなふへき

「三二オ

よはなけなるをおもひわひてかすみわたれる

「三二ウ

月のけしきにも心のみそらにあくかれにたる
になかめわひてれいの中納言殿にたたらひて
なくさめむとおほしてさきなどもこと／＼し
うもおはせすしのひやかにておはしたれはれ
いならすしめやかにてうちの御とのゐにまいら
せ給ひぬといふかひなく口をしくうちへや
まいらましなとなかむるにさうのことのねほのかに
聞はたるにきとみゝとまりてさならんかしと
おもふにこれもあさからす心をみたりし
人のしほやくけふりになりにしそかしと
思ふにいまでもおもひはなたぬ心はむね 「三三オ

⑫

うちさわきてとかくまきれよりてかいまめはは
しちかくすたれをまきあけてひきいてたる
音をきくよりも月影にいと身もなくきぬ
かちにてあへかにうつくしうなまめきたる
さま尚侍のかみときこゆともかきりあればこれに
はいかゝまさり給はんとするすくれたる名は
たかけれとかくはおもはさりしをまことにいみし
うもありけるかなと思ふに又たましひ一はこ
の人の袖のうちに入ぬる心地してみすきてた
ちかへるへきこゝちもせすうつし心もなく
りにければさはこよひいりなむと思ふに夜ふく

れは人／＼はとかくよりふしあるは庭におり
て花の陰にあそひなとして御まへには人
もなきにこのうへにかたふきかゝりてつく／＼と
月を詠て

「三三ウ

春の夜もみる我からの月なれば心つくしの影と成けり
とひとりこちたるちゝはゝとてもあまたのなかに
すくれたるおもひかきりなかなりみる人とても
さはかりめてたくすくれてゆきかゝつらふ所
もなくいとあまりよつかぬまでまめやかなる
をなに事の心つくしなるにかと聞に
いよ／＼すくしかたくなりまさりておしあけ

「三四オ

てつゝますあゆみいり給ふを人／＼は中納言
のおはすると思ひておとろかぬにふとよりに
忘られぬ心や月にかよふらん心つくしの影とみけ
るは けはひのあらぬにあさましとあきれて
かほをひきいれ給ふをかきいたきて帳のうち
にゐていりぬやゝとおひゆるやうにし給ふ
御まへちかき御めのとこの左衛門といふきゝつけて
とのゝおはしましつるとおもひつるをいかなれ
はとおとろき^{イデナシ}てよりたるにいひやるかたなく
いみしき御けしきなるにしのひやかに
なき給ふけはひなるをあな心うやいとつら

「三四ウ

⑬くおほしすてしかとしふねき心にか

れぬ御ちきりはかゝるよもありけるそかしいか
におほすともいまはかひあるへき事かはたゝさり
けなくてをとこしらへ給ふにその人なりけり
ときくもあさましういみしけれとけに
いふかひなければ人にたにしらせしとおもひ
御まへにはいらせ給はぬなりまろは御まへにさふ
らはん月をも花をもよくみあかしたまへといへ
はわかき人／＼あはれしれらんこそといひ
なからあそひいてぬめり女君は中納言にならひ
て人はたゝのとやかににつかしようちかたら

「三五オ

ふことよりほかにはなきものとのみおほすにいと
したちなさけなきもてなしなるにたえ
いりぬはかりなきしつむけはひありさまの
かきりなくあはれにらうたけなるにかくての
ちも心やすくあひみさらん事のわりなき
になほ中納言はあやしかりける人かないみし
うまめなるはこの人に心さし^{イデシ}のたくひなき
とのみおもひしをさま事なりけるひしり心
にこそありけれとめつらかにもさま／＼おほゆ
あふ人にしもあかぬ夜をまいてはかなうあ
けぬなり左衛門いられわふれはいてぬへき心
ちもせねとさりとてあるへきならねはなく／＼

「三五ウ

心のかきりたのめちきりて出給ふ心ちいめの
やうなり

⑭ 我ためにえにふかければ三つせ川後のあふせも

誰か尋む なほおほししらぬこそかひなけれ

といへといらへもせず左衛門にいみしき事ともかたらひ
て立かへりても夢かとたにえおもひわかすよとなか
れぬ女君はましてあさましうつゝとおほえぬ

心まとひにきえいる心ちしておきもあかり給

はねは御心ちのわひしきにやなと人とみ

たてまつりあつかふに中納言うちよりまかて

一三六オ

給ひていり給へるにいとゝいかてみえたてまつらんと
わひしきまゝにひきかつき給へるをなとかくはととひ
給へは御まへなる人よへよりれいならずおはしまして
となんきこゆれはいとほしく心くるしうおほし
てそひふし給ひていかにおほさるゝそいまゝて御さう
そこのなかりけるよなといとなこやかにあてはかにみあ
つかひ給ふにつけてもいとゝめつらしかなりつるけし
きはふとおもひいてられてむねふたかりぬうへもいか
なる御心ちそとおほしさわきてまつりはらへ
なにやかやとさわかしけなれば中納言もたち出給は
すそひみ給へはさゑもんかもとにたちかへりひま

一三六ウ

なき御ふみをたにみせたてまつらすあとたえ
たるまゝに宰相の君は月ころの物おもひにいよ／＼

かさねつる心ちしてわひしくたへかたくかくては

いきめくるへき心ちもせずとしころものゝいとかく

おほえましかはいまゝていきめくらましやはとおほ

へてこれかれとまとへとすへきやうもなし左衛門

かもとには日にちたひみくらの山の所なきまで

かきつくし給ふをわかやかにものふかゝらぬ心地

にはえもいはずあてになまめきたるけしきし

ていのちもたえぬはかりなきわひ給ひし

あか月をいとあさからす心くるしとみ奉り

一三七オ

一三六オ

にし心のしみにしかは御ふみのひまなきことの

⑮ はなとあはれにかなしけなるもいとほしくは

なちかたくいろめきたる心にはおもへれはいといめの

やうなることのちそのまゝにいみしくおほし

いらせ給ひて御心ちれいならず物したまへはとのゝ

ひまなくそひおはしてかひなきまでもえこの

御ふみをひきいてぬよしをおなしさまにかき

おこせけにさもあらんかしときえいりぬは

かりなりしけしきも思ひいつるにうらめしきも

わすれてこひしくかなしきにわれもおき

あかりありきせんこともおほえすつく／＼と

一三七ウ

一三六ウ

おきふしなけきわひつゝさても中納言のあさ
からすみえなからいかなりける事そとよあり
しよのほとにこそ中納言もなきしつむらめ

おほかたの人からはいとめてたくめもあやにすく
れてなつかしうあいきやうつきなからかやうのかた
はあなちにもとねたくうちおもひはなちて
なさけなくもてなしイニシてすくすなりつらん
かしとおもひやるもいとめつらかにありかたかり
ける人の心なりいまよりのうちやとけんとお
もひやるさへむねうちふたかれはいかにかまへ
てぬすみいてゝしかなとおもへとかけても我

一三八才

⑩に心をかほしつゆのことの葉をかはさはこそあら
めさりとてひたふるにみたれいるへきやうもなし
さはかりこめかしくあへかなりつる気はひあり
さまには中納言のめてたくなよひかになつかしう
たゝうちかたらふのみこそあはれに心につき
ておもふらめわれをはなさけなくうかりしと
そ思ひいて給らんとおもひやるに涙もとゝ
まらす月をみるにもみるわれからのとひとり
こちしおもひいづれはかきみたる心ちす中納言は
さしてそのことゝなくおとろゝしからぬ御心
ちにてすきゆけはさのみもえこもりぬ給はす

一三八ウ

大殿うちなどにまいり給はむとてかくのみ
はれゝしからぬ御心ちをありき侍らんほと
こそいとしつ心なかりぬへけれよのつねにおき
あかりなとして心みさせ給へなる事もおなし

心にきこえ給のたまははせて過すくしつるこそはいつまでと心
ほそくおほゆるみちのほたしにもまつたれ
よりもひきとゝめらるゝこゝちもし侍りつれ
かくてのみしつみふし給へるを見侍れはいとゝ
なからふへくも侍らすものむつかしうおほえ
侍と御くしをかきやりつゝはなゝと匂ひみちた
る御かほになみたをうけたまへるまみのけしき

一三九才

いみしうあはれなり女君いさゝかをゝしく
⑪あらゝしきけはひもなくたゝうちかたらひ
てすくしつるはつゆにても心おくふしましり
てもおほえさりつるをわかよにしらぬうきちき
りゆゑこの人にもへたゝりおほえぬへきことゝお
ほしつゝくるにこたへもやり給はすいとゝかほ
をひきいれてなき給ふけしきなれはいと心えなく
もしわれをおろかなりなど人のきこえたるに
やといとほしく心くるしければうちなけきいと
とうまかて侍りなん御まへに人おほくさふら
ひ給へものゝけなどのするわさなめり心えぬ御
けしきのましるはといひおきていて給ひぬ
うちにまいり給へれはないしのかんの君の御かた
に女房などめつらしかりきこえて日ころのもの
かたりなどするついでに宰相の君といふ人はいかにそ
さとのしるへにあらぬ身のつねにうらみらるゝか

一三九ウ

むつかしきにゆつり聞えてしみやことりはあなつ
らはしわたくしの心さしそへられしとにや
このひころはおとなきこそめやすく侍れとこまや
かにわらふ辨じの君その中将はなやみ給事あり
とこそいふなりしかけにひまなくゆきあひう
るさきまでおとつるゝ人のこの日ころおとな

一四〇オ

きはむへなりけりいとほしかりけることかなときゝ
おとろかれてうちよりまかて給ふまゝにたちより
給へれはうちきくにむねつふるゝものからあさ
からすおとろかれてたいめんし給へれは日ころれい
ならぬひやうさにかゝり侍りてとちこもり侍つる
かいふせさにうちにまいりてはへりつるにいたはらせ
給ふ事ありてひさしくまいらせ給はずといふ
人の侍つれはおとろきながらとの給ふにかほあか
むちちしていとゝしつかならぬ心のうちながら
わさとことゝしかるへきにも侍らねとみたれ
かはしうおこりたち侍ぬる時はたうこきなども

一四〇ウ

せられぬくせにてゆてなとし侍るとてこもり
ぬ侍るにこのものせさせ給ふひやうさたれに
かといふにもうちわすれてひかこともしつへし
ことゝしからすいひなせといといたくあをみ
おもやせてまめやかにくしたるをれいは見るたひ
ことにうるさきまでよろつにかたらひみたるゝ

にことすくなにしめりたるは氣けにおほるけなら
す心ちのあしきなめりとみゆるもいとほし
けれと女君のれいならぬけしきのおほつかなけ
れはまことに御けしきなほれいならすけなり
たきのよとみはつかしけなるまでもやせ給ひ

一四一オ

⑱にけるかな御心ちのくるしきにはあらしいかなる
⑲御心ちのみたれそとうちちほゝゑみていひあてたる
におもてあかむ心ちすれともこれにそうち
わらはれてしほれすかたはいまのみや御らん
するといたくみたれぬほとどのけしきにてかへり
いて給ふゆふくれのたとゝしきかすみのみまより
にほひこほれたるさくらのほなにもほひおさるゝ
まてめてたきをつくゝとみおくりてかゝる人に
あさ夕めなれてわれをはなにとかはおもはんつき
せずつらきもことわりかなとおもひつゝくる
にいとゝ思ひやるかたなく涙こほれてつゆ

一四一ウ

まとろまでのみよをあかし給ふかくのみなけき
⑳いられ人めもえはゝかりあふましくせめわ
ひ給ふに左衛門いと心よわくかたらひなひかさ
れて中納言れいのうちの御とのゐなるをりゝ
夢のやうにみちひきいれたてまつるを女君は
たひことになみたにまつはれてつゆにても
人にけしききゝつけられてはいかてなからふへき

身そとおほしいりなからもほのかなるゆきあひ
のをり／＼うつし心もなきまでなきまとひ
いらるゝさまなまめかしうあはれけなるも
たひかさなれはみしられ給すもあらず

「四二才

②①中納言のいとめてたくすくれなからよそ／＼に
くまなくてすきありかんもいかにとかむへきに
いさゝかのまよひなくまめやかなるさまのありかた
くよのためしにもひきいてつへきそかしまし
てこの人のかほつきにゝたる人さへさしいてなほ
わか家のひかりにこそはあらめと涙くみつゝ
いひつゝけ給ひていみしく多みてわたり
給ひて帳のまへにゐ給へるにいとくるしくて
ね給へるにどのゝ御けはいのちかくすれはおき
あかり給へるにいみしくうれしとおほしたる
さまにてより給ひていかにそれいならぬ御心ち

「四二才

をいまゝてきかさりける事御いのりなともせさすへ
き事となきになき給ふをあやしかやうには
つねに心ちなやましくのみおほゆるをあやし
かりけることのちは物なげかしく心ほそく
のみおほゆるをまことにさる事もあらは中納言
いかにおほさんおなしさまにてみえ奉らん事
のみしさをおほす心まとひにあせになりて
おはすれはあいなき物はちやとていみしくう

れしくおほしたるさまそかきりなきやかへり
給ひてもさま／＼のくた物なにやかやとおほし
いたらぬくまなくあつかひ聞え給ひてうへにも

「四三才

とくわたりてみ給へときこえ給へははつかしうも
②②おほすらんあまりけさうになきこえ給ふそとの
②③給へはいてやそこそ大將女御の御かた／＼をこそ思ひ
聞え給へれこの御かたにはおろかなるなめりかくし
るくなるまでしらぬ人やはあるとしころおもひ
聞えし本いありてわかむねをあげ給ふへき
事とて御めのとゝもめしてかならずしもえ
②④みしり給はしけによき日なりよさりかならず
しもおほしたらんにほのめかしきこえ給へなど
の給ふほとに中納言おはしたりさりや夜を
たにふかし給はぬさまこの人の御心おろかには
／＼しからましかはいかにむねいたからまし女
は后になりてもなにゝかはせむこの人にもちゐら
れたらんのみこそめてたかるへきことなれかしこ
くおもひよりにけりと我ほめをしいひちらし
ゐ給へるもいとあはれなり中納言御ものまいら
する御まかなひ中つかさのめのとさふらひておとゝ
のおほしよるこひてとく聞えさせよとの給はせ
つるよしほのめかしいてたるに中納言む
ねうちつつふれてあさましときくに御かほの

「四三才

さとあかみたるをはつかしくおほしたるなめ
りと心えてさはいへと若の御さまやおかしう

一 四四オ

うつくしうみたてまつる女君はいとわひしく
あせもなみたもひとつにてひきかつき給へるを
中納言もれいのやうにふし給へれとなに事をかき
こえ給はんよつかぬ身のうつしさまにてな
からふるをかりそめにしつ心なく思ひながらそ
のことゝなきかきりはたゝはゝうへの人におされぬ
おほえあなつらはしからさめるをみすてたて
まつりてはいかなるやみにかまとひ給はんどのもふえ
うのものにおほしすてすひとひも御らんせられ
ぬをはいとおほつかなきものにおほしたるなどを
②⑤さま／＼そむきすてたてまつりてもいとつみ

一 四四ウ

あさからすこそならめとさすかにすか／＼し
くもおもひたゝすありふれはつひにをこかまし
きこともいてきぬる我身の心のうちこそ人にゝ
す心うけれ大かたの世のおほえはちりつゝへうも
あらぬ身をよにとりてはしれかましようみおもふ
人あらんいみしき事なりかしかくて有な
からいまたふりさりけるさまなどをあやしと
おもひあやむる人もあらむなとさま／＼に
いとうき身のはつかしさなりやかゝる身にては
いくよもあるましきほとひとりあらんとお

もひしをくやしう心うくもあるかなとつゆ

一 四五オ

まどろます思ひあかざるゝになほ世の中にあとゝ
めんかたもおほえすたれならんかゝる事の
ありけるをなほなに心もなくいていりましらひ
つるをいかにをこかましようちまもる人もあら
②⑥んなとつく／＼とおもひあかしてかたみにとみ
にもおきあからすそむき／＼にておきいて給ふ
とて女君をひきおとろかすにいよ／＼ひきかつき
まさり給へはいとたへかたきわさかな月ころも
あやしくゆるされぬ御けしきとみ侍なからも
もりなき身つからの心のまゝになに心なく御らん
せられつるをよつかぬ身のありさまをいかにおほし

一 四五ウ

なるぞなといとほしうこそなけれ侍に心も
しらすとのゝひとへにおほしとかめさせ給はんこそ
いとくるしけれいかゝおはしはて給ふへきいさや
これよりすきたるらん心さしの行方もしり
侍らさりけりや。人にはたゝわくるかたなく御あたり
はなれぬはかりをたくひなき事におもひ侍り
けるしれ／＼しきも身つからこそくやしく
はつかしくもかへす／＼思ひ給へらるれといとのと
やかにいみしうはつかしけにてしのひかたき
ふし／＼はかりをうちほのめかして我心のうちに
もいつくをうらみ所にかはと心なからもおかし

「四六オ

うおほゆるにいとしもこゝろうこくほとどの心やまし
きはなきなるへしえもいはすにほひやかにうち
ほゝゑみてふし給へるをみるにいとゝしき
心ちはなきしつみ給へるもこしらふへきことの
はもおほえねは御まへに人さふらへやといひ
おきて御てうつめしておこなひ給ふにも我心
のうちはいたく心うこきあなかにものをくるし
②⑦う思ふへきゆゑもなきに人はおこかましどもよつ
かすともさま／＼めをたてゝおもふらんこそい
②⑧といみしうはつかしけれなそやすへてつひに
なからふるおこたりにかゝるたかひめはいてきぬる

「四六ウ

そなといとゝおもひとちめつる心ちして経を
つく／＼とよみぬ給へるなにとなくものおもはし
き御心のすむにまかせてと。此間に経文あるへき所也ふしんうちあけていみしう
たふとくよみたまふなるをきゝふし給へる女君
の御心ちたへかたう悲しくおもてのおき所なく
歎きみたれ給ふをも人はいかてかしらむめつら
しううれしきことをよるこひ思ひて大殿
にもいつしかとほのめかしきかせたてまつり
給へるを殿はいとあやしうあさましき事
かな中納言いまはさるかたによにならひなく
ましらひたちにたればよつかぬ身をしる

「四七オ

とてもさのみおもひなけくへきならぬをよと
ともにいみしく物おもはしけなるけしきなども
かやうにしたにあやしき事のありけるみたれ
にやときゝおとろかれ給へといかなることそととひき
こえ給はんもいまはいとはつかしけなるさまおや
といひなからはゝかられてえきこえて給はず
人きゝはれいさまにきゝはやし給ひかほなるを
中納言はとのゝおほすらん事中／＼かたはらいたく
おほえていてましらふも我にはをこかましども
あやしともめをかけてみる人あらんかしと
おほすにいとゝ人をはくも井に物とほくもてなし

「四七ウ

よをかりそめにおもひなすかほをいまはもて
あらはしてつきころは女君をもさるかたに
あさからすちきりかはしておきふしもなつか
しうひとつ心にてよつかぬわか身にたくひ給ふ
へかりけるちきりも心くるしうよのつねのまよひ
などありときかれたてまつらすもかなとうちの
御とのみなとにたちとまれるよな／＼もいかにおほ
おほすらんなとおもひはゝかられふかくあはれ
におもひきこえしをかゝる事ののちはあやし
②⑨くもありけるかなとほししらるらんと思ふ
にはつかしうもあいなくも心のうちはへたゝる

「四八オ

心ちしてむけにさのみうらなかるらんもおこかまし

かるへければいとありしやうにもむつひ給はぬを女は
ことわりにはんかたなくはつかしうかなしとおほし
いりてうちとけてもさらにみあはせ給ふ時なく
なかのうとくもといふやうになりゆく御けしきを
さはいへともまことのちきりこそ心にいるらめとのみ
心う イカサ かるにあなかにうらみなくさむへきやうも
なけれはけしきもあらぬさまにひきよけおもひ
すましたるさまふかくなりまさりておはする
をりもとかちにたゝおこなひにのみこゝろをいれて
あけくらし給ふ大殿うちの御とのみかちになり

一四八ウ

たるをめつらしきことそひてはいますこし心さし
そひなるとおもひしをいとあやしと人ともみたて
まつる殿もうへもあやしく中納言のさうしかちに
よかれにこのころなり給へるかないかなる事にかあるら
むとなけ給ふをみきゝ給ふ御心ちおき所なく
わひしういかてきえうせ身をなきになしてし
かなとのみおほしなるをかの人左衛門あさからす
心をよせたるみちのしるへなれば心ちのあり
さまなとくはしく聞にいとゝあはれにちきり
のほとおもひしられてさはれよのつゝましさ
人めのみくるしさもしらすぬすみかくして トイ もかなと
いられまさり給へときはたあるへき事ならねは
おもひみたるゝ事おほかるよにそありける中

一四九オ

納言の君はさい相のいとありしやうにはあらず
いみしく物をおもひいれたるけしきもとより
心さしふかしときゝしにこの人はかりこそあ
らめさはいへとこと人はえふと思ひよらしをさらは
こと人よりもうちまほりしたにおもはん事の
はつかしくもねたくもあるへきかなとおもひよれと
さしてさはしりかたき事なりかしなそやいとうき
世中にせめてなからふへきおやの御おもひなどを
ふかくたとるほとにかゝることもいできぬるそかし

一四九ウ

などちゝに思ひあくかれて見えぬ山ちたつねま
ほしき御こゝろそやう／＼いてきにけるその
頃よしの山に ホ 宮ときこゆる人おはしけり
せんていの三のみこにそおはしましけるよろつ
の事すくれておくれたることなくよの人のしとする
事かた／＼の御えおん ついで はやう天文いめさう人など
いふ事までみちきはめたるさえともなりける
この世にあまりすきてむかしはうかくさうとて
十二年に一度もろこしにさるへき人わたし
つかはしてかのくにのさえをならはされけりす
ゑの世となるまゝに人のようめこんしやういとわ
ろくなりゆくによりたうにわたる人たえにたるを
われわたらんとせちに申こひてわたり給ふに
ければそのくにゝまちうけて ひのもと 日本の人あまたわた

一五〇オ

りきぬわかくにゝもかしこき人おほかれとみち／＼のさえかはかりかしこき人なかりきとおとろきあふきてそのくの一の大臣ならひなくいつきかしつきけるひとりむすめにむこにとりておもひいたつきけるほどにほどなくうちしきり女二人をうみおきてそのはゝなくなりにけりあかぬ世の人なりとてもものとはよくつかぬこゝちもせずこのくにはしらすにほんにておのつから

一五〇ウ

女御后みかとの御むすめをはしめてみしにかはかりのかたちさましたる女のたくひなかりきとふかく心をとゝめてかへる御こゝろもおもひたえにけるにかなしういみしとはよのつねなりやかてそのくにのうちにて本いをもとけ身をもすてむとおほしけれとかたみにとゝまり給へるひめ君にひきわかれんこともかなしくおほしわつらひしほどにその大臣もかなしひにやまひつきいのちたへすしてなくなりにつければいとゝたつきなくさへなりてありめくるへくもおほされぬに其時の大臣公卿又むこにとらん

一五一オ

ときこえけるを又人を見るへき心ちもし給はさりければかけてもきゝいれ給はさりければねたき心ともいてきてころさんとさへかまふるけしきをきゝ給ふてをしからぬいのちとはいひな

③〇からしらぬくにゝわか身をはふらかしてんこそいとかなしくわれをまたなく思ひあかめいみし③①く心につく人のあるときこそふるさとしもわするゝこゝろもありけれありにくゝおそろしくかへりなまほしき事いてきてこの女君たちをみすてんもいみしくかなしきにもろこしのうみになにしようといひける人をさせまるかいて

一五一ウ

わたりけるにえわたらすなりにけるより女かよはぬ道ときけといかゝはせんふねとむるかいりうわうもあらはやかてわれもたひのそらにいのちをすてんをしからすとひたふるにおほしなりてなくなりにし大臣のこともにかたらひてにくるやうにてかへりおはしけるにあしきりうわうもいかに心かはりけるよにかふねのよとむ時なく思ふかたのかせことさらにおくるやうにて帰り給ひにけれとよのためしにもいひなかされしたうの女のはらにこともありけるなといはれしとおほしたれはこの姫君たちをいみしくか

一五二オ

くしてゐてのほり給ひてあらぬよのさかひになりてしもけふりと成給ひにし雲井さへはるかにへたゝりかなしき事をおほしほれてうちしのひこの君たちをかきなてつゝ又人をけちかく此世にみるへきものとおほされすうちたえ

はてゝなく／＼^{イナシ}すこし給ふにいかゝしけんこのみこなん^{イなんナシ}おほ

やけの御ためにうしろやすからぬ心をもひて
我こそくにのわうならんもたうりなれとおほ

しよりたるといふ事いてきてはるかなる山の

さかひにもはなちつかはされぬへきを夢のやうにき

きまとひすへて我このよにれいのかたちにてあるおこ

一五二ウ

たりなり心はかりはあらぬ世にすみはてなからむけ

につきなくなほ君たちの御あつかひをしてましり

ゐたらんことのつきなさにいかにもわかよと物おもひ

しり給ふまてとおもひすくしけるいとくやし

きことゝおほし立てにはかに御くしおろし給^{イナシ}

ひてよしの山のふもとにおもしろき御りやうありけ

るに此君たちもひきくしいつちともなく人にも

みえしられて入給ひにしよりのちとりのね

たになつかしくきゝなれしもおとつるゝ人なき

よしの山のみねの雪にうつもれてすくし

給ふひめ君たちの御かたちありさまのあはれ

一五三オ

にあたらしくはかなくかきならし給ことねも

からくにのほんたいおほえて人にすくれ給へるをあ

はれにかなしくみたてまつり給ひていまは我身

はかりこれよりふかくあとあてなまほしきそまた^に

しる人なくいみしき御ありさまともにひたすら

うきよをえゆきはなれ給はぬほいとゝこゝろせ

けれとさり共おのつからいさゝかも人めきいて給ふ

みちのしるへはかならずいてきなんとこゝろにふかくおほ

しさとりてちきりさためたる人をまたんやうに

おほしけり中納言いとゝ^{イ無}いかてよにあらしと

おほしなることまさりて花もみちにつけても

一五三ウ

よもの山へにましりて人にゆくへしられてはひこもる

へからんたにのかくれみねのうへのさすかにおもひ

をそへつへき所ありやおほしまはすによしの山

のみやの御うへをくはしくかたりいつる人ありてその御す

みかなむけに世すてはなれたるひしりの御すみかと

②はみえなから水のなかれいはたゝすまひもみやこに

はすへてめなれぬさまにてものおもひもなく

さめかつは心ゆきぬへき御すまひなるとかたり出たる

をさる人もし給ふとはみなきゝおき給へれば

世をそむかんもむけにやまふしなどのあたり

にたちよりてその人のてしになりてあら

一五四オ

むはさすかにもおそろしくわひしかるへきを御^イはへ

も有さまもなへてには物し給はしかしといまゝて

わかおもひよらさりけることおほしてこのかたる人をめ

してなにのゆかりにしたしくはしりたるそとは

せ給ふをちに侍人かの宮の御てしにてよるひる

御あたりもはなれてほとけにとりわき思ひ給ふ

かやうありてさふらふにさるへきとき／＼あひとふ

らひまかり侍ると申いとうれしき事かな我その
宮をとしころいかてしりたてまつりてまいりかよ
ひて世にたえたるきむならひ奉りまたみおよは
③③ぬふみのところ／＼きゝあらはさんとおもひながら

一五四ウ

さはかりすみはなれたる所ある御心によもうけ
ひきたまはしと思ひはゝかりてくちおしくおも
③④ひすくすを御けしき給はらせよろしくおほし
めされはいみしくみそかにまいらんといとね
むころなるけしきにてかたらひ給ふいとたはや
すき事にさふらふなりと申せはさらはこのこ
ろのほとにまいれとの給へはいにけりをちのそう
にしか／＼とのゝ権中納言のかう／＼申させ給ふ
とくはしく聞ゆればさき／＼さるへき人まいり
給ひ御さうそことも申させ給ふもありし
かとすへてまたよにありけりと人にもきゝつけ

一五五オ

られしとてさらになむきこしめしいれぬもの
となりたれば此四五ねんはおとつれきこえ給ふ
人もなかめるをいかなるへき事にかはいかにも御けし
き給はりてきこえんとてしはしとゝめてか
う／＼なむわさとなにかしかをひなる人
つかひにて給はせたと申せはとはかりうち
おほしめくらしさばかりえいやうにまとは
れてめてたきてふはなの事のみこそ心に

いるらめいかにきゝ給ひてかふかき山までおほし
いるらんそれもさるへきえむものし給人に
こそあらめいとうれしくなれたちよらせ給へ

一五五ウ

といと御心にいりたるけしきにてすか／＼し
くうけひき給ふをいとあやしけれとおほし
うる所あるにこそあるへきと心えていとかたき
事とといとほしくかひなくてかへり給はんこと
を思ひつるにかう／＼なんの給はするとかたればよろ
こひなからかへり参てくはしく聞ゆかつ／＼おも
ひかなひぬ心ちしてうれしき事かきりなし
あなかしこかくなむと人にきかすなとくちかため
給ふへしこのたひあまり世をそむきなん事
あへなかるへしとおほしなむ又よかなりとう
けひき給はゝたゝ人の御ありさまみたてまつり

一五六オ

てこの世ならすたのみ申よしをちきり聞えて
③⑤このたひはたちかへりなむとおほすいめいみしく
さわかしくみゆとつくる人あればきよきわさ
せさせしに七八日はかり山てらになむあるへきそこ
としられぬればこゝろあはたゝしく人／＼きな
としておこなひもまきるゝ心ちすなといひまき
らはし給ひていてたち給ふとても女君とは
二三日ともへたゝるへきほとはおほつかなかるへきことを
③⑥あはれになつつかしくうちかたらひしきさるかた

にあさからぬ御なかとみえしをこのことの後には
③7 かの御心のうちの人めもおこかましなければさし

一五六ウ

もあらずなりにたるを女君はいとはつかしくかな
しきものからかゝるにつけてもあなちなる人
のちきりあさからぬあはれはこよなく身にし
みたるもわれなからいと心うし中納言もさこそ
おほすらめとおしはかるもそれをうらむへき
ゆゑある身かはおもひはなれよろつをみきゝ
しりかほならぬそねたけなりける御ともには
しるへせし人はかりさては御めのとこやうの人し
たくおほす四五人はかりいみしくしのひて
まうて給ふ九月はかりなればむら／＼けしき
はみゆくやまのけしきもあはれなるにまた

一五七オ

見もしらすとほくわけ入給ふまゝに心ほそく
あはれに殿上とのうへなにごとがおはしますらんと
おほつかなくかりそめとおもふ道たにかうこそお
③8 ほゆれましていまはと思ひたらんほとより人
わろくおほししらるゝイナシ

③9 涙しもさきにたつこそあやしけれそむくたひにもあらぬ

山路を 道よりしるへの人さきたてゝたてまつり給へは
御しつらひかきはらひつくるひて御そたてまつ
りかへなとしてまぢきこえ給ふうちいるきはにソイ
おはしたるよし御そうそきこゆるもいたく

よういしていりおはしたりふせんれうの所／＼

一五七ウ

秋のくきつくしてぬひたるさしぬきにを花色の
さうかんのあをにくれなるのうちたるぬきかけて
ひかりをはなちはな／＼とめてたくたゝいまこく
らくのむかへありて雲のこしよせたりともなを
とゝまりてみまほしき御ありさまなりに事
もみなくちをしくあせゆく世のすゑなれとか
かる人のものし給ひけるよとおとろかれてと
はかりまマツとり給ふにいとゝもてしつめてさふ
らひ給ふみこの御ありさまもいとよきけにおは
しける人のおこなひにやつれたまへるさまいろし
ろくかしらいとあをやかにあてにかはらかにて

一五八オ

④0 おもひやりきこえつるほどよりはわかくきよけに
おはします御物かたりやう／＼うちとけゆくまゝ
にさえのほとなどこの世にあまりてこと／＼に
すくれたりける人かないかてかゝらんとめつらかに
おほすひめ君たちの人めきいて給はむしるへなりと
御心のうちにさとりおほせはいとなつかしくうち
とけ給ひてむかしよりのことゝももろこしに
わたり給ひてありしさまかなしういみしき
めを見てよになき女二人をえみすてひヒれいなき
④1 やうなるよのおときゝかしこく身にそへてうかり
し世のみたれにもひきかゝりなほこの人とを

「五八ウ

みちのほたしにて是よりふかくも身をえかくさ
ぬよしをいひつゝけ給へるもあまりすくしてひしり
たちでもみえずあてやかにあはれけにうちおほ
しのとむるけしきみる人も涙とゝめかたきに我
もなく／＼さてイモナシものし給ふかたゝいまの人め
は人よりけに心ほそくもくちおしくもあるへきにも
侍らねといはけなくよりあやしく世にたかひ
人にゝぬありさまにてやう／＼物思ひしらるゝま
まに世にありにくゝおもひなるさまを聞え
給へはみなさみえ給ふ所あればうちなき給ひて
しか御心ならずおほすへき事なれとそれしはし

「五九オ

の事なりいかなるにもこの世の事ならずさきの
④②世のものゝむくひなれはともかくも人のおほすへき
このよによをなけきをうらむるなんいとこゝろお
さなくむけにさとりになき事に侍るへきさらにおほし
いとふへき御事にも侍らすつひにはおもひのこと
かみをきはめ給へきちきりいとたかくものし給ふ
なりくはしく聞えさせすともおのつからさいひき
かしとおほしあはするやうもあらんうたて
さう人めかしくきこえつゝけしとの給ふ
をいかにみ給ふにかあらむにはかによつかぬ
身をなにゆゑにかみをきはむへきかとおほ

「五九ウ

す女君たちの御事をか／＼しき身にははへら
すともよにめくらひはへらんかきりはうしろみ
たてまつりてんさらにその御事うしろめたく
おほしめしそときこえ給へはむかしよりさ
らに人にかゝる事ありときかせ侍らぬをさ
るへきにやあやしきとはすかたりをきこへ出つ
るも常のことなど思ひたまへかくへきならずかう
なからも女の身すめれとすてられすそむか
④③れぬものにてあひとふらひ給ふ人なくては
侍ましきわさとはかりを所せく思ひはへれと
人のちきりすく世みな侍るわさなれはさ

「六〇オ

らにこの山によをつくせなとゝゆいこんし思
ひ給はすしか思ひおきて侍れとすく世といふ
もの侍れはそれしもかなひ侍らし人きゝ
おとろ／＼しからすおもりに身をもちぬよと
も思ひ給へすたゝすく世にまかせてとなんその
④④ほとこのいまたはるけきにやといと心くるしきト
かうトるトせトく思ひ給ふるとうちなきつゝつきすへう
もあらぬ御物かたりに夜もあけぬめてたくなつ
かしき御あたりに御物かたりとでもろこし
からくにまておほつかなくとゝこほる所なく
ちこくのそこさうとのおくまてくもりなき心ち

「六〇ウ

補注

- ① 「るゝ」を摺消し、その上に「ひの」と書く。
- ② 左に「ねは」。
- ③ 「けは」以下「ひてあたりいとわかかてにおほとかにおは」脱。
- ④ 「およふ」の右に「思ふ」。
- ⑤ 「は」を摺消し、その上に「言」と書く。
- ⑥ 「す敷」の右に「かた敷」。
- ⑦ 一字分摺消し（判読不能）、その上に「る」と書く。
- ⑧ 「は」の右に「イニなる」。
- ⑨ 一字分摺消し（判読不能）、その上に「は」と書く。
- ⑩ 左に「イナシ」。
- ⑪ 「給ひ」以下「しよりみすのうちにはいれ給ひ」脱。
- ⑫ 一字分摺消し（「は」か）、その上に「わ」と書く。
- ⑬ 「う」を摺消し、その上に「ふ」と書く。
- ⑭ 字母は「八」。左に「は（者）」。
- ⑮ 「はな」を摺消し、その上に「は」と書く。
- ⑯ 一字分摺消し（判読困難）、その上に「は」と書く。
- ⑰ 一字分摺消し（「い」か）、その上に「ひ」と書く。
- ⑱ 「みたれ」を摺消し、その上に「くるし」と書く。
- ⑲ 字母は「地」。傍記の字母は「知」。
- ⑳ 「給」を摺消し、その上に「わ」と書く。
- ㉑ 「に」以下、京都市歴史資料館蔵本で一丁分の脱落（他の明阿弥本も同様）。その本文を示せば以下のとおり。
て人めはかりなさけあるさまにのとやかにさ
まよきめうつしにはかういといみしうしぬは

- かり思ひいらるゝ人を心さしあるにこそとおもひ
なからけしきにても人のもりきゝたらん時とお
そろしうそらはつかしきに人しれぬあはれの
みしられすもあらずなりにけるもわれなか
らいと心うと思ひしらるゝかくのみ物をおもひ
はれ／＼しからてあかしくらすにことにおほしも
わかぬに三四月にもぬれぬれはみな人みたて（五〇才）
まつりしりておとゝ此月ころさしてそこはか
となきおほん心ちのかくのみれいならぬはも
しあるやうあるにやとたつねあないし給ふにもた
しかならぬかきりはさもきこえさりつるを御ゆな
とまいる人とみ奉りてさにおはしけると聞
ゆれはいといみしとおほしてゑみひろこりて
いまゝて御いのりなともせさりける事とさわき
給ひて中納言の心さしなとのよこめもせずねんも
ころなるさまにてさはかりの人さまにてはのころ（五〇ウ）
- ㉒ 一字分摺消し（判読不能）、その上に「さ」と書く。
 - ㉓ 左に圈点。
 - ㉔ 左に圈点。
 - ㉕ 左に圈点。
 - ㉖ 左に圈点。
 - ㉗ 「く」を摺消し、「と」と書く。
 - ㉘ 左に圈点。
 - ㉙ 「ら」「と」ともに左に圈点。
 - ㉚ 左に圈点。

- ③1 右に傍記「くみしよもイ」
- ③2 「は」を摺消し、その上に「い」と書く。
- ③3 字母は「者」。傍記の字母は「八」。
- ③4 「さゝ」を摺消し、「すく」と書く。
- ③5 「み」を摺消し、「い」と書く。
- ③6 「も」を摺消。
- ③7 「なりにたるを女君は」を摺消し、その上に「心のうちの人めも」と書く。
- ③8 左に「さぞ敷」。
- ③9 一字分摺消し（「う」か）、その上に「ら」と書く。
- ④0 左に圏点。
- ④1 一字分摺消し（「に」か）。
- ④2 「も」を摺消し、その上に「と」と書く。
- ④3 左に「イナシ」。
- ④4 左に圏点。

〔付記〕

本稿で掲出・参照した『とりかへばや』伝本の典拠は以下のとおりである。貴重な資料の利用に際しご高配を賜った所蔵機関に、厚く御礼申し上げる。

九大本↓原本／京都市歴史資料館蔵本↓国文研デジタル

なお、本稿はJPS科研費24K22466の助成を受けたものである。

（ちば なおと・本学専門研究員）